

天眼鏡

もう一つの畜産危機

ウクライナへのロシアによる侵攻にともない穀物ははじめ諸資材は値上がりし、農業全般が大きな影響を被っているが、特に酪農をはじめとする畜産経営への打撃は大きい。今年3月に中央酪農会議が公表した実態調査結果報告によれば、①日本の酪農家が経営する牧場の84.7%は過去1か月の経営状況が「赤字」、②赤字経営の酪農家の4割以上は1か月の赤字額が「100万円以上」、③酪農家の86.0%が借入金を抱え、そのうち、6軒に1軒は「1億円以上」とされており、瀕死の状況にあるといっても過言ではない。

言い換えれば、生産コストの高騰に対し、乳価や食肉等の販売価格がこれに見合った幅で値上がりできているわけではまったくなく、一方で子牛の販売価格が暴落するなど、経営そのものが成り立たない危機的な状況に追いつ詰められているのが実情である。

こうした畜産危機の一方で、実はもう一つの畜産危機が発生しており、今回はこれを取り上げておきたい。畜産はと畜をして正肉を販売し、消費者の口に届けられるが、と畜をすれば骨やら内臓等の副産物を必ず発生する。副産物はレンダリング産業により徹底的に利用されることによって廃棄物を出さないようにされている。すなわち生体重700kgの牛がと畜されると、骨80kg(生体重の11%)、脂50kg(7%)、血液56kg(8%)、内臓70kg(10%)、原皮56kg(8%)、その他98kg(14%)が発生する。内臓等の可食部分はモツ等として消費されるが、不可食部分については食品(食用油脂、天然調味料、ラーメンスープ、マーガリン、お菓子、ゼラチン、ガム等)、生活用品(ペットフード、肥料、飼料、接着剤、フィルム、石けん、化粧品等)、医療・健康用品(内服用カプセル、サプリメント、コラーゲン等)として、それこそ余すところなく使われている。そして原皮についてはなめしたうえで「皮」から「革」にされて、靴やバックをはじめとする様々な生活用品として活用される。

その原皮であるが、と畜場で発生した生皮は、生産者の委託を受けたと畜場によって原皮業者に販売され、これを原皮業者は付着した皮下組織や脂肪等を除去して塩蔵・脱水処理し、国内外のなめし革業者に販売する。

その原皮価格が豚皮で、この10月に東京市場で、これまでの10円/枚から2円/枚に価格改定された。2018年にCSF(豚コレラ)が発生して価格は下落・低落を続けているが、CSFが発生する前には180円であった。6年程前のわずか1.1%の価格への低下である。

価格下落に伴って、原皮業者の調達価格は下がることになるが、原皮業者からなめし革業者への売値は、さらにこれを大きく上回っているという。その背景には人工皮革へのシフトとアニマルウェルフェアの影響があるとされる。原皮業者の調達価格2円/枚は廃棄物とはしない最低の価格であり、マイナスの調達価格はあり得ない。したがって原皮業者は下限に貼り付いた価格での調達を余儀なくされる一方で売値下落との板挟みとなって、大幅な採算割れが続き、店仕舞いを本気で考えざるを得ない危機的な状況に置かれているという。

原皮業者が店仕舞いして困るのが、副産物の持って行き場がなくなると畜場であり、副産物の循環が途切れてしまえば国内での畜産自体が成立し得ない事態にもなりかねない。

酪農をはじめとする畜産危機ばかりでなく、消費者・国民にはほとんど知られていないこうしたもう一つの畜産危機があり、問題が顕在化されていないだけにさらに深刻であるともいえる。まさに畜産業界あがでの対応が不可欠であり、原皮の新たな利用開発も含めた抜本的な対策が求められている。

(農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一)